

平成 29 年 4 月 16 日（日）

# 安全講演 「美しき待乳山」

## ～仏画・浮世絵鑑賞の入門～

浅草寺学芸員 藤元裕二

### <講演の流れ>

- (1) 浅草寺の歴史のあらまし
- (2) 浅草寺の戦後復興のあらまし
- (3) 悲願の雷門再建
- (4) 待乳山聖天本龍院所蔵「十六羅漢図」について ※本日のメイン
- (5) 浅草寺所蔵「文殊菩薩騎獅像」について
- (6) 待乳山聖天本龍院所蔵の浮世絵 ※本日のメイン

### (1) 浅草寺の歴史のあらまし

浅草寺は、もともと比叡山延暦寺をいただく天台宗に属し、戦後に聖観音宗として独立した。現在も基本的な教義は天台宗により、天台宗の縁故宗派である（故・清水谷孝尚貫首は、故・半田孝淳天台座主の弟）。

- ・ 推古天皇 36 年（628）：創建。漁師の檜前浜成・竹成兄弟が隅田川（当時は宮戸川と称する）で漁労中、1 体の観音像を網にかける。仏像と知らぬ彼らは、何度もお像を川に投げ返すが、その度に網にかかる。不思議に思い、地域の豪族（知識人）である土師中知のところに持ち込んだところ、像が観音像とわかる。土師中知は自宅を寺と改めた。
- ・ 大化元年（645）：勝海上人が立ち寄り、観音堂を修造し、夢のお告げに従い本尊を秘仏化する（現在に至る）。
- ・ 天安元年（857）：慈覚大師円仁が浅草寺に来たる。秘仏であり本尊を拝めないうえ、代わりとなるお前立を造立し、さらに観音像の版木を彫る。
- ・ 天慶 5 年（942）：公卿の平公雅が武蔵守への補任を浅草寺に祈願し、成就する。その報謝のために七堂伽藍を建立する。
- ・ 治承 4 年（1180）：源頼朝が立ち寄り戦勝を祈願する。文治 5 年（1189）にも奥州征伐の成功を祈り、浅草寺に荘園を寄進する。以後、武家の尊崇を受け続ける。
- ・ 正平 7 年（1352）：足利尊氏が立ち寄り戦勝を祈願する。

- ・ 慶長 5 年（1600）：徳川家康より戦勝祈願の祈祷を命じられる。
- ・ 慶安 2 年（1649）：徳川家光が伽藍を復興。本堂など主要堂宇は東京大空襲焼失まで、約 300 年にわたり維持される。
- ・ 元文 5 年（1740）：幕末に至るまで、上野寛永寺の支配を受ける。
- ・ 明治元年（1868）：明治維新。結果的に徳川家・寛永寺の支配から脱する一方、維新期の混乱や政府による上地（浅草公園となる）などにより、暫く不遇の時代となる。
- ・ 大正 12 年（1923）9 月 1 日：関東大震災により仲見世が全焼。主要堂宇は倒壊を免れたものの、念仏堂、絵馬堂などは全壊する。
- ・ 昭和 20 年（1945）3 月 10 日：東京大空襲により主要伽藍がほぼ全焼する。僅かに、伝法院、二天門、薬師堂、六角堂などが残るばかりとなる。
- ・ 昭和 33 年（1958）：本堂再建円成。

## （2）浅草寺の戦後復興のあらまし

浅草寺の伽藍は何度も戦災や自然災害により被害を受け、その都度に復興してきた。第二次大戦後の伽藍再建は、以下の通りに進んだ。

- ・ 昭和 20 年（1945）：東京大空襲により伽藍ほぼ全焼。
- ・ 昭和 33 年（1958）：本堂再建。
- ・ 昭和 35 年（1960）：雷門再建。
- ・ 昭和 38 年（1963）：宝蔵門（仁王門）再建。
- ・ 昭和 48 年（1973）：五重塔再建。主要堂宇の再建が完了する。

## （3）悲願の雷門再建

江戸時代末期・慶応元年（1865）の大火により雷門が焼失する。以後、仮の門が何回か建立されるものの、さまざまな問題があり、なかなか本格的な再建には至らなかった。つまり、「総門がない」という寺にとって異常な状態が続いた。そして「雷門」の名は当時から非常に有名であるため、「名があって、実のないもの」の代名詞にもなってしまう。

昭和 20 年（1945）に浅草寺の伽藍はほぼ全焼の憂き目に遭う。当時の貫首である清水谷恭順僧正（1891～1979）は、伽藍復興に邁進する。本堂は寺のもっとも重要な堂宇であるため最初に建立されるが、戦後復興を象徴する雷門再建も強く望まれていた。その中で、昵懇であった松下幸之助（1894～1989）が雷門再建費用の全額を寄進し、およそ 1 世紀ぶりに雷門の再建が成った。なお現在も、提灯の架け替えにあたってはパナソニック（旧松下電器）が資金を負担している。

#### (4) 待乳山聖天本龍院所蔵「十六羅漢図」について

浅草寺の清水谷恭順貫首は、伽藍復興を切望し、聖天さまに成就を祈願していた。晴れて本堂・門が再建され、復興の進捗が明確になり、昭和 39 年（1964）、報謝の意を込めて個人所有の「十六羅漢図」を待乳山聖天に奉納した。

##### ○ 羅漢とは

仏教絵画（仏やその世界観をテーマとした絵画）で好まれた尊像の 1 つである。釈迦如来につき従い、その教えを守るために現世に留まる聖者であり、基本的には僧侶の姿で表現される。竜や虎を従える、空を飛ぶ、光を放つ、などの様々な力を持つ。禅宗では理想的な修行者の姿としてあがめられることも多い。造形においては絵画・彫刻のいずれもがあり、一般的に「十六」、「十八」、「五百」などの集合像の形式を採る。

日本において羅漢図は、平安時代から描かれていたテーマである。画期としては鎌倉時代前後があり、羅漢図を含む中国絵画が大量に輸入され、その影響を色濃く受けた。中国絵画の模倣から始まり、やがて、創意工夫を凝らすようになっていく、という趨勢がある。

##### ○ 本龍院所蔵「十六羅漢図」よりうかがえる仏教絵画の構造

羅漢図を眺めると、そこに秘められたさまざまな工夫がうかがえる。仏はヒエラルキーが明瞭（如来→菩薩→明王→天部など）であるため、絵画においてもそれを示す必要がある。つまり、尊いものを、より尊くみせるための知恵が盛り込まれているのである。例えば尊いものを、

- ・ より大きくする。
- ・ 中央に置く。
- ・ 他のものに取り囲ませる（守らせる）。
- ・ 視線を集めやすいようにする。
- ・ より丁寧に、より豪華に表現する。

などである。現在の私たちの目には、以上は当たり前であり、工夫でも何でもないと思ってしまうが、おそらく先人たちが試行錯誤し、練りに練った成果であり、それに私たちはずっと親しんでいるため、自然に思ってしまうだけと思われる。

○ 本龍院所蔵「十六羅漢図」の特徴。

南北朝時代・14世紀にさかのぼる名品である。作者は不詳（古い仏画の作者は、概してわからない）。複数の先行する羅漢図から羅漢の姿が取り込まれ、空海（774～835）、聖徳太子（574～622）、善導（613～81）、叡尊（1201～90）を取り入れた、非常に珍しい作である。特に羅漢図に善導と叡尊を入れる例は、本作以外に知られていない。

### （5）浅草寺所蔵「文殊菩薩騎獅像」について

浅草寺に、一幅の「文殊菩薩騎獅像」が伝わっている。この作は、本龍院第14世・眞昭住職（幕末～明治期の住職）が納めたもので、待乳山と浅草寺の間で、文物の往還があったことがわかる。

### （6）待乳山聖天本龍院所蔵の浮世絵

本題に入る前に・・・。

<浮世絵とは>

「浮世」とは現世の意である。「浮世」≡「当世風俗」を主題とした絵画を浮世絵と総称する。一般に版画が多い。江戸時代より始まったジャンルで、当初は墨一色摺りから始まり、やがて紅摺り、そして明和期の鈴木春信により確立された多色摺りへと発展する。豊国、北斎、広重、国芳、芳年など、著名な絵師も多い。なお江戸時代においては、浮世絵師は絵師のランクの下位であった。テーマは多彩で、名所など風景、年中行事、美人、役者、春画などがあげられる。また、時事的なニュースや、店舗の広告なども盛り込まれた。

<複製美術としての浮世絵>

浮世絵の多くは版画であり、概して大量に作られる。そのため紙の大きさ（大判、中判など）も自ずと統一されてくる。1枚で楽しむ浮世絵もあれば、3枚セット（三枚続）の作もある。同じ図柄のものが、複数の美術館に伝わる例も多い。大量生産された浮世絵版画は一般に安価である。町の絵草紙屋で販売され、現在の価格で1枚500円ぐらいであった。

### <浮世絵の品質>

「同じ図柄」の浮世絵であっても「同じ品質」とは限らず、概して初版に近いほど上質である。版を重ねることは、すなわち同じ版木を何度も使用することであり、版木の彫りの鋭さは徐々に鈍くなり、直線も勢いを失い、水分の吸収と蒸発の繰り返しは、木の収縮によるゆがみを生じさせるためである。人気図柄のものは、版木の彫り直しも頻繁に行われた。

色を染ませた版木を紙に摺る工程ゆえに、ニカワで溶いて紙に定着させる顔料（岩絵具）は使い難く、植物由来の染料が用いられた。そのため紫外線に弱く、褪色も進みやすい。美術館で展示される折、照明の暗い部屋に置かれ、かつ長期間展示されない理由も、この耐久性の弱さにある。

### <総合芸術としての浮世絵>

浮世絵は、総合芸術の側面もある。まず企画するプロデューサーらがおおり、構想が練られる。それに基づき版下を絵師が描き、そして彫師が版木を作り、最後に摺師が摺る、という工程を経る。一方、幕府は情報統制に苦慮しており、プリントされ大量に市井に出回る浮世絵にも注意していた。浮世絵版画は、幕府の検閲を経て出版された（検閲の印は「極印」という）。

### ようやく本題に。

待乳山には、待乳山、あるいは浅草寺が描かれた多くの浮世絵が伝わる。

待乳山は、浮世絵の好テーマであった。その理由は幾つかあるが、一つには待乳山が古今屈指の霊場であること、また一つには待乳山が古代以来の名所であったことがあげられる。近隣に人気スポット（隅田川、墨堤、浅草寺、三囲稲荷、大川橋<吾妻橋>、猿若三座、吉原など）が多いことも重要である。所蔵の浮世絵のなかで、待乳山と他の名所を一図に表したものとして、歌川豊国「隅田川浅草遠望」、歌川広重「江戸名所 隅田川見三囲堤」などがある。

### ○ 瀟湘八景をテーマとした浮世絵

「瀟湘八景」とは、中国湖南省の風光明美な地（桃源郷のモデルにも）における、8つの景のことで、古くから知られる名勝である。季節や天候、時間などを違えた8つが選ばれ、「瀟湘夜雨」、「平沙落雁」、「烟寺晚鐘」、「山市晴嵐」、「江天暮雪」、「漁村夕照」、「洞庭秋月」、「遠浦帰帆」がある。中国より日本にも、「教養人が愛すべき理想的な風景」としてその知識がもたらされ、やがて「近江八景」「金沢八景」など「八景もの」が盛んに描かれることになった。隅田川流域を描いた八景ものに、待乳山がしばしば登場する。所蔵のものとしては、「待乳山夜雨」（「江戸八景」）、「真乳晴嵐」（「江都八景」）、「待乳山秋月」（「隅田川八景」）がある。

### ○ 新しい知識・技法の入れ物としての浮世絵

浮世絵は、その名の通り「浮世」（現世）を表現したものであり、その当時の世相を映し出す性質があるのみならず、基本的に大衆向けに売り出されることから、西洋由来の新しい知識・技法が積極的に用いられる側面もあった。例えば、西洋由来のプルシャンプルーの使用や、西洋画の遠近法（特に一点透視図法）の活用などがあげられる。所蔵のものとしては、昇亭北寿「東都金龍山浅草寺之図」などがある。

### ○ 明治期以降の浮世絵

浮世絵は、明治時代以降も盛んに描かれ続けた。江戸時代以来の、新しいものを盛り込むという性格は変わらず、明治20年（1887）に鉄橋として架橋された吾妻橋（旧大川橋）や同年に建設された人造の富士山「浅草富士縦覧場」、明治23年（1890）建設のタワー「凌雲閣（十二階）」などが描かれた。新しいモチーフが表わされる一方、構図そのものは江戸時代以来の型が反復される。所蔵のものとしては、歌川国利「東京名所の内 浅草公園地 金龍山浅草寺一覽の図」、「東京名所 浅草公園十二階」などがある。

---

～ぜひお運びください～

## 「待乳山浮世絵展」

9月16日（土）～10月4日（水）